琉球大学学術リポジトリ

# 八重山の集落形態と災害リスクへの対応：明和津波後の集落移転を中心に



| メタデータ | 言語: |
| --- | --- |
| | 出版者: 沖縄科学防災環境学会 |
| | 公開日: 2022-07-25 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 得能, 壽美 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002019386 |

# 八重山の集落形態と災害リスクへの対応
## ー明和津波後の集落移転を中心にー

得能　壽美（法政大学沖縄文化研究所兼任所員）

### 1.　はじめに

八重山における「明和津波」研究には、牧野清『八重山の明和大津波』（牧野 1968）をはじめとする先行研究の蓄積がある。しかし、いわゆる津波石をはじめとして、多くの課題も残されている。その一つに1771年八重山・宮古を襲った地震津波の名称が、慣習的に「明和津波」と称されている点がある。かつて、八重山歴史研究会は、地元新聞紙上に公表した「明和津波」に関する論説において、「乾隆の大津波」という名称を提唱している（八重山歴史研究会 1982）。最近では、豊見山和行が「宮古八重山津波」という「歴史用語」の使用を提唱しており（豊見山 2008:21頁）、あらためて議論のうえで変更・定着をはかる必要がある。小稿では、「明和津波」の称を用いた。

これまで著者は、いわゆる「明和津波」に関して研究の基礎史料となる八重山から王府への報告書「大波之時各村之形行書」と「大波寄揚候次第」の翻刻と現代語訳にかかわり、『石垣市史叢書12』として公刊した（石垣市総務部市史編集室 1998）。その後、亜熱帯総合研究所の「亜熱帯研究のための研究可能性調査」による「沖縄における自然災害リスクとその対応力に関する基礎調査」にかかわり、「古文書から読む『明和津波』―情報の収集と伝達を中心に―」などをまとめた（得能 2000ａ・ｂ）。

これらの「明和津波」研究に加えて、2007年に公刊した『近世八重山の民衆生活史』において、全般的に近世八重山の島・村における集落と耕地との関係について考察した（得能 2007）。一箇所にまとまった集落を形成する居住形態に対して、耕地は集落から遠く島外・村外にまで分散して保有するというのが、その関係であり、耕地を分散保有することについての説明は―そこにも災害リスクへの対応があった―できたと考えている（近世琉球の村と耕地についての概説的報告は〔得能 2012〕参照）。しかし、なぜ一箇所にまとまった集落を形成して住むのか、という基本的な課題には答えていない。とりわけ、1771年集落に甚大な被害を受けた「明和津波」以後もその集落形態は変化させておらず、小稿では「災害リスクへの対応」という視点から、近世八重山において、先の課題を考察してみた。

### 2.　八重山の近世集落の成立と形態

#### 2-1　近世集落の成立

八重山の集落について、近世以前の「中世の村遺跡」の特徴として、道路がなく、石垣による屋敷割が方形でなく不整形であり、「サイズもまちまちな不整形で不均質な屋敷が細胞群のように連結し、石垣の一部を狭く切った出入り口によって屋敷から屋敷へと連続しているのが特徴…村の残っている場所をみると、その多くが海岸に面した隆起珊瑚礁の崖上や島の中を走る亀裂の崖上に立地するという共通の特徴をも」つといわれる（小野 1999：41頁）。

この特徴―「村が高い崖の上にあり、石垣で囲われて防御されねばなら」ない（小野 1999：43頁）―を持った集落は、14世紀に出現して16世紀初めには使用されなくなり、やがて近世集落へ移行していくのだが、14世紀における防御の最大の理由はいわゆる「群雄割拠」の争乱の時代であったこと、15世紀は琉球王府の統治拡大にともなう「南進」によって緊張が高まったことがあげられている（小野 1999：60頁）。「群雄割拠」時代における争乱については疑問があり（崎山 2000：156・158～159頁、得能 2010：247～249頁）、さらに、15世紀「海岸の崖の上や丘陵の上の防御された村は、最終的にはまさに琉球王府との抗戦の拠点となった」（小野 1999：60頁）という指摘にも、そこでの事例が波照間島や竹富島の集落であることから、歴史的には疑問が残る。しかし、「その村の廃絶は、八重山の敗戦により王府が実施した村の改編の結果を示している」という指摘は（小野 1999:60頁）、歴史的な経緯としては説得力がある。

防御について疑問は残るものの、崖上の石垣に囲まれて道路のない集落という状況は、災害リスクへの対応ともみられ、ここでの興味では当然ながら一箇所にまとまって住んでいることになる。

さて、八重山の近世集落は、「中世の村遺跡」が廃絶し、さらに移動を経て成立したもので、日本年号の正保年間（1644～47）に調査・作成された「宮古・八重山両島絵図帳」で、古琉球からのつながりの一部を知ることができる。そこでは、村高100石以上の村が石垣島・西表島を中心にいくつかあり、最大は石垣島大浜村の803石余である。一方で、小島嶼においても一つの島がいくつかの村に分かれていて、村高が20石に満たない村々が

あり、のちに大幅に統合されて、島単位で一つの村とされていく。たとえば、竹富島では、「宮古・八重山両島絵図帳」にみえる玻座間村（19 石余）・仲筋村（18 石余）・はれはか村（14 石余）の３か村が、のちに竹富島一島で竹富村一村となるが、３か村の村高を合計しても 52 石余である。規模としては、集落というより、一家族といったほうがよいかもしれない。

近世竹富村の集落は、現在みるように島の中央部に集まっており、近世に玻座間・仲筋とされた集落の境界は明確ではない[1]。

石垣島東海岸の白保村でも、かつて「前ぬ村」「白保村」「真謝村」「兼久村」と称する集落が並んで存在したといわれ、近世にはそれらを総称して白保村という行政村となった。ところが、その白保村の人口が増加して、18 世紀中頃には白保村の集落を白保村・真謝村に分村する案がいわれている。白保・真謝の分村は実施されなかったが、同じときに提案された石垣島の中心部である登野城村と大川村、石垣村と新川村の分村は実施され、石垣四か村となるが、その村の境界は集落の境界であり、道一つを隔てて村を分けている。もし白保・真謝の分村が実施されたならば、同様に一つにまとまった集落を二つに区分することになり、古琉球の状況に戻るようなことになった（得能 2009：３～４・８～９頁）。

近世八重山の行政的な村の集落は、これまでみたように由来は別にしながらも、おおむね一つにまとまっているという傾向を示している[2]。

### 2-2　近世集落の形態

八重山に限らず、琉球の近世集落の形態については、屋敷の配置などに関心がもたれてきたが、「さまざまな側面を持つ集落を、その外見的な形態から具体的に論じた研究は、意外なほどに少ない」という指摘もある（高橋 2003：153 頁）。八重山の集落研究は、「明治期の村絵図」（現在、沖縄県立図書館蔵）が公開されたことで大きな転機を迎え、絵図史料をもとにした実証的な研究が進められるようになった（武者・永瀬 2000、高橋 2003 など）。

小稿では、集落の内部構造など以前の問題として、なぜ一箇所にまとまって暮らすのかという課題をかかげた。前節で述べたように、竹富島を例にすれば、「中世の村遺跡」とされるハナスク村・クマーラ村・シンザト村が移動・展開して、17 世紀の半ばには玻座間村・仲筋村・はれはか村が確認できるが、それらは島の中央部に外から判別できないぐらいに集まっているのである。

集まって住むことの要因を、これまでの研究史からいえば、石垣島川平、鳩間、与那国島祖納の集落について、前述の「明治期の村絵図」などから検証した結果、「集落形態の違いはあるが、古来の腰当思想による集落構造は、それぞれ踏襲しているといえる」といわれる（武者・永瀬 2000：389 頁）。ここでいう「腰当（クサティー引用者注）思想による集落構造」は、いうまでもなく仲松弥秀によって提示されたもので、端的な『沖縄大百科事典』での仲松の解説をかかげると、

> 村の祖霊神は村人全体のクサティ神、御嶽はクサティ森である。このクサティ森のほとんどは村の背後に位置し、その前に村の根屋がある。根屋は御嶽をクサティとし、その前方に屋敷を構えて展開した分家などが、またおのおのの親元家を背にしクサティにする。かくして村全体が御嶽（祖霊神）をクサティにして形成されてきたことになる。

ということになる。つまり、仲松のいう「古層の村」は一箇所に集住する形態でなければならないということになる。

八重山での集落の発祥にかかわる「区画された地域」を意味するハカは、牧野清によって沖縄のマキとは異なるもの、つまり仲松がいう「同一御嶽の氏子集団」ではないとされた。しかし、「後年トゥニムトゥのない、すなわち祭祀集団の居住していないハカも生まれているところから、むしろ『古代集落の行政区域』であるとみるのが妥当ではないかと思う」（牧野 1974→牧野 1975：525 頁）というのは、むしろ反対で、古くはトゥニムトゥ（集落創立にかかわる宗家）のいる同族祭祀集団が居住していた区域をハカといったのではないだろうか。八重山においても、沖縄と同様な理由で同族がまとまって住んでハカと称し、やがて行政的な区画へと展開し、いくつかのハカを含む近世村（集落）が成立したと考えることができる。その経緯のなかで、新たなトゥニムトゥのないハカ（行政区画）が生じる理由があったのではないだろうか。

考古学は、八重山の古琉球の集落遺跡は「近接しながらも点在している傾向」がみられ、「ひとつひとつの集落が小集団を形成し点在している」と指摘する（島袋 2005：１頁）。さらに、西表島の祖納上村遺跡を事例に、「点在していた集落を屋敷囲いを持つ近世集落的なグリット内へまとめられていった」という指摘（島袋 2005：４頁）を合わせると、ハカの由来と近世集落への移行の解釈が証明されているように思える。

近世八重山の集落で、もう一点指摘しておかなければならないのは、先述のように耕地が集落から遠方に分散して所在したということである。八

重山の場合、与那国島を除き、石垣・西表両島の周辺に位置する小島嶼は、両島に田畑を有し、材木を伐採したり、飲料水を得たり、牧場を有したりした（得能 2007、得能 2012：７頁）。また、人口の多い石垣島での耕地は、近世になって北部地域の開発が進められ、村域を超えた通耕の実態が知られている（得能 2007、得能 2012：５・７頁）。そもそも地割の制度があるうえに、いくつかの田原に分散して自分田地を有することは、農業経営では集約的ではないことになるが、旱魃・水損などの災害リスクを分散しているということができる（得能 2007：139 頁）。

このことを集落の側からいえば、集落と耕地は同一の村内にあるとは限らず、人々は耕地から離れた集落にまとまって暮らしていたことになる。

## 3. 明和津波の被害と集落移転

### 3-1 明和津波による集落の被害

1771 年旧暦３月 10 日に八重山・宮古を襲った地震津波は、とくに石垣島の南から東海岸に立地する集落に甚大な被害をもたらした。まず、石垣島南部の人口が集まる石垣四か村（登野城・大川・石垣・新川）では、船の航路としてサンゴ礁が開鑿されたサクリグチを通過してきた波によって大きな被害が出たものとみられる。犠牲者の割合は、登野城 55%、大川 32%、石垣 27%、新川 20%と、波源から遠くなるにつれて小さくなるが、犠牲者の実数を合計すると 1560 人（男 641 人・女 919 人）にのぼる（以下、津波被害の数値は「大波之時各村之形行書」による）。四か村はもともと士族人口の割合が大きく、これらの犠牲者のなかに頭をはじめとする地元役人が多く含まれている。

家屋の被害は、登野城 184 軒、大川 174 軒、石垣 48 軒、新川 139 軒で、田畑の被害は四か村の東端にあたる登野城、西端にあたる新川にあり、これら二か村に挟まれた大川・石垣にはない。

四か村には蔵元をはじめ、在番仮屋、桃林寺などの公共施設があり、それらも被害にあった。

四か村から石垣島の東海岸を北上するにつれて被害は大きくなる。犠牲者の割合と被害を受けた家数は、平得 48%・178 軒、真栄里 77%・176 軒、大浜 92%・210 軒、宮良 86%・149 軒、白保 98%・234 軒、伊原間 87%・130 軒、安良 96%・90 軒に達する[3]。これら東海岸の村々では、田畑の被害も大きかった。

以上の村々の集落は、平得を除いて海岸近くに立地し、すべてが一箇所に集まって集落を形成していた。四か村では、現在の四号線道路に崖があって、それ以上に津波は押し寄せなかったが、東海岸の村々では犠牲者の割合をみても、一箇所に集まって暮らしていた集落が壊滅している。

なお、石垣島西海岸の村々や、西表島の村々、小島嶼での被害は、住民に石垣島に出ていて犠牲になった者もいたが、集落への影響はさほど大きなものではなかった。

そこで、津波後の復興策は、石垣四か村と東海岸の村々の集落の移転と、被害の少なかった小島嶼などの住民をそれらの村に移住させることであった。

### 3-2 明和津波後の集落の移転

石垣四か村の移転は、蔵元などの役所も含むものであり、時間をかけて検討された。ここではまず、東海岸での様子をみよう。

「大波之時各村之形行書」では、海に面していない平得は「本之通村建相済」と、集落をもとの場所に再建したとある。次いで、真栄里より東・北の村々では、「本村敷より〇〇之方〇〇町、〇〇と申所に村建仕申候」と、もとの集落地では再建できずに、別の場所に集落を移して復興にあたった。

真栄里では、もとの集落から北北東 13 町７間の嘉謝内原に再建し、西表島西表村から寄百姓をした。のちに、もとの敷地（現在地）に戻っているが、道路を挟んで接している平得集落は、この時に移転しておらず、両者は明らかに異なる集落形態をしている。真栄里集落が再移転によって現在の集落を新たに建設した結果、平得集落に比して「桁違いに規格性・整然性・画一性を有している」と指摘される（高橋 2003：212 頁）。このような様相は、真栄里集落が津波後の嘉謝内原への移転、旧地への再移転に際して、計画的に全村をあげて移転したことを示しているといえるだろう。

次に、大浜は、もとの集落より西北西３町 10 間の田原という所に再建し、波照間島から寄百姓をした。御嶽ともども移転したが、ともに旧地に戻り、現在に至っている。大浜集落については、1892 年（明治 25）に分村を求める文書があり、そこに当時の大浜集落の様子が描かれているので、次章で紹介する。

宮良は、もとの集落より北北西 14 町 50 間の漢田に再建し、小浜島から寄百姓をした。これは、宮良川河口左岸の海岸低地にあった集落を、仲嵩御嶽近くの漢田という高台に移転したことをいっている。その後、時期は未詳だが、もとの海岸低地に戻ったといわれる。「明治期の村絵図」および現在の宮良集落は、国道 390 号より北側の高台にあるが、これは、1874 年王府派遣の風水師与儀通事親雲上によって移転を指示されたものという。ただし、与儀通事親雲上がまとめた「北木山風水

記」には、当時の集落は悪石が多いので「旧地」に戻れといっている。

白保は、もとの集落より北北西 11 町 20 間の上野地に移り、波照間島から寄百姓を入れた。上野地は生活に不便で、もとの敷地（現在地）に戻っている。その際に、集落の南北で形成時期が異なる可能性がいわれているが、「全体に共通する集落計画が存在したことは確実である」という（高橋 2003：200～201 頁）。

伊原間は、もとの集落より北北西３町 40 間の玻名野に移り、黒島から寄百姓を入れた。移転先は、バンナーと称される山の南麓一帯の原野とみられ、これは現在の伊原間集落の北方にあたり（松村 1994：22 頁）、やはり現在地に再移転している。

安良は、もとの集落より北北東三八間の安良原に移転し、平久保村から寄百姓をしている。安良集落は、津波前後に何度か移転しており、その位置については、〔石垣市総務部市史編集室 1997〕の「安良の集落図」にまとめられている（〔松村 1998〕参照）。ひじょうに狭い範囲で移転しており、津波被害の甚大さから考えて、津波後の移転は安全面では有効と思えず、またその後は津波時よりさらに海岸近くに移転している。

以上の石垣島東海岸の村々では、集落は明和津波時にも、その後の移転、さらに再移転にあたっても、集落はひとかたまりで動いている。しかも、津波後の集落にはほかの島からの移住者もおり、伝統的な集落とはいいがたい構成になっている。それでも、集落は一丸となっており、津波の危険のない高台に残るとか、耕地の近くに住むといった個別の選択はみられない。

最後に石垣四か村の移転について、簡単にまとめてみる。先にも述べたように、石垣四か村には支配にかかわる公共施設があり、とくに蔵元は最重要の施設であった。その蔵元は災害時には災害対策本部にもなって、救助、復旧、復興を指導する機関となるのだが、八重山のそれは壊滅した[4]。

八重山では、「四カ村は在番所があり、奉公人（士族－引用者注）も多くおり、ことに蔵元には万御条目や御高札・御制札ならびに諸帳面、特に渡唐船が不意に来着した時に、勅書や王府の御物を保管することもある重要な公共の建物である。もしこの大津波のような災害が起こればたいへんなことになるので、最重要の蔵元を永く安全に置くため、元の村より北方の文嶺（ブンニ）という高台の地へ、四カ村とも村敷地を替えて村建てしたいと、野国親雲上が在番の時に願い出た」（大波之時各村之形行書№13）。

詳細な王府への文書では、津波から一か月に満たない４月５日には、四か村にも残った家があってもとの村に住んでいるといっている（大波寄揚候次第№３）。次いで５月付けの在番野国親雲上から王府宛文書では、とても旧地での再建はできないので、四か村や蔵元の移転をいっており、移転先について２、３の候補地を検討しているという（岩崎 1927→岩崎 1974：363～364 頁）。７月には移転先が風水師によって保武嶺（ブンニ）に決定（大波寄揚候次第№38）、９月 11 日王府はこれを許可する文書を出した（岩崎前掲 364～365 頁）。

翌 1772 年になって、八重山の役人は、四か村のうち二つの村はもとの敷地に住まわせ、残りの二村を徐々にブンニに移転させ、蔵元や諸役所も分散させるように指示を出した。ところが、ブンニでの用水の便、耕地への往来、海浜での御用布の晒しなど、不自由な点がいわれるようになった。そこで、王府派遣の者、八重山の役人らに意見を述べさせ、無役の士族青年、百姓らの主立った者たちに投票させたところ、23 対 567 で旧地に戻ることになった。王府に対して、このことを認めてほしいという文書は、1775 年になってまとめられている（御手形写抜書№９）。

旧地での再建に反対した人々は、「地形高所江村建永々心安相住居度旨申出」（地形の高い所に村建てをして、永々と心配なく住みたいと申しでた）のだが（同前）、圧倒的多数で押し切られた。こうして、四か村の集落、蔵元などの役所は、津波以前の地に再建されることになり、災害への対策は講じられることはなかったのである。反対派にしてもブンニで暮らしたという伝えはなく、現在地にまとまって暮らしたようだ。

## 4. 近代における八重山の集落

### 4－1「明治期の村絵図」の抱護林

明治 20 年代に八重山を訪れた塙忠雄によって作成あるいは蒐集された村絵図には[5]、すべての集落に災害から集落を守る抱護林が描かれている。もちろん、近代からのものではなく、1857 年「翁長親方八重山島規模帳」（№227）においても、「抱護浜・抱護屋敷の囲み樹木」についていわれている（後述）。

「明治期の村絵図」によると、石垣四か村は集落が連続しているので、抱護林は大きく四か村全体を包んでいる。集落を包むというのは、海岸に立地する集落の海側にも抱護林があるということである。

四か村では、海岸に人家ではない建造物のある大川の海沿いで抱護林が切れている。これについて、「明治期の村絵図」と同時期に八重山を訪れた笹森儀助は、「八重山群島ハ総テ海岸ニ樹木ヲ植ヘテ隠蔽ス。故ニ海中ヨリ之レヲ望ムモ、人家ヲ

見ル能ハサル普通ナリトス。只石垣四ケノミハ、他府県商人ノ移住アリテ、村外ノ砂浜ニ依リ家屋ヲ建ルモ、従来ノ土人ハ樹木ナキ砂地ニ住居スル者ナシ」といっている（笹森 1982：203 頁）。大川の断絶は、寄留商人の木屋によるものであり、村民が切ったわけではない。

抱護林は防風・防潮を目的とするほか、風水の観点からも集落を守るものであった。先述の 1874 年「北木山風水記」には、集落背後の山に「抱護の情」をいい、「後ろの山林一帯の樹木は、もともと本村の風水に係わる。もしそれがよく茂り、よく伸び出て、錦の屏風のような勢いであれば、生気は凝結して人民は必ずや繁栄するであろう」などといわれる（№.４－２）。また、海岸についても、「海浜の地は、もっとも風を受け易いので、ぜひとも遮蔽のたすけがなければならない。それでこそ風をたくわえて気を集め、楽土を永遠に保てるのである。本村の前の海浜一帯には風を遮るたすけがない。それでは吉ではないので、ぜひともその一帯に少し樹木を栽え、それによって風を遮るべきである」という（№.４－４）。

先に紹介した「翁長親方八重山島規模帳」（№.227）では、

> 仮屋や寺敷・番所、その他抱護浜・抱護屋敷の囲みの樹木の育成については、以前から申し付けているが、次第に手が届かずやせ衰えた所もある。今のままでは、風水に差し障るのはもちろん、風雨の時は人家・田畑も損害を蒙り、島中の衰微のもとになるがどうであろうか。以後必ず、時期を見計らい松その他適当な樹木を植え付けさせ、保護の目的が確実に果たせるように取り計らうこと。

といっており、集落や屋敷を災害から守る目的があった。

琉球の集落の形態には、全体が森林によって囲い込まれているという原則があるといわれる。それは、具体的な防風機能と風水思想によるものであり、「中国における土の城壁と土の文化、朝鮮半島における石の城壁と石の文化、日本における木の城壁と木の文化」に対して、「琉球においてはいわば森林の城壁ということを指摘できるのではないだろうか」といわれる（高橋 2007：212 頁）。

八重山でも、集落は抱護林に守られた内部にあり、村民はそこにまとまって居住して抱護されるのである。したがって、人々はその外で暮らすことはない、ということになる。

### 4－2 近代の集落についての話題

その後、八重山の集落について語られたトピックを二つ紹介しよう。まず、1892 年（明治 25）八重山島三間切の頭惣代であった宮良当宗は、沖縄県知事丸岡莞爾に宛てて、人口の多くなった大浜集落の一部を、同じ大浜村内にかつてあった大城集落の地に移したいという文書を提出している（離方間切之村々廻見日記）。

そこに当時の大浜集落の様子が描かれている。人口は 740 人におよび、集落の敷地が狭く、磯辺にまで家を建てて住んでいるので、「大風」のときには家の中にまで波が押し寄せてきて、家財道具などが流されるという。

集落地に比して人口が多くなるのは、明治期に四か村のひとつ大川村でも確認でき、御嶽の地や人頭税廃止によって必要がなくなるとされた布晒地などを、次三男など分家用の宅地として分譲している（得能 2008：50～55 頁）。これは、もともとの集落と続く地に、集落を拡大したことになり、まとまって暮らす志向をひじょうに強く感じられる。

1892 年の大浜集落では、130 名余りの人が、このような生活を嫌って大城の地への移転を承諾しているといい、大城村に役人をおいて独立村にしたいという目論見なのだが、その後、大城村が成立したという痕跡はない。「右場所江分配請合候者百三拾名余」（右の場所＝大城への移転を承諾した者、130 名余り）は、はたして移転を快諾していたのだろうか。

その後の大浜村の戸口は、1894 年 138 戸・780 人（崎山 1975：122 頁）、1903 年 160 戸・943 人（琉球政府文教局 1967：273 頁）で、ひとかたまりに住んだまま人口は増加しており、先のような居住環境に変わりはなかったようだ（〔得能 2006〕参照）。

その後、1936 年（昭和 11）11～12 月、八重山の「海南時報」紙に、「産業発達の基礎工作－耕地中心の部落構成を提唱す」という論説が掲載された。八重山における農業経営上での重大な欠陥は「農村と耕地の距離の問題である。即ち耕地を中心として構成されてゐない農村の現状である」とする。そして、

> 先祖代々から此の状態におかれてゐる農家の伝統的感念からすれば耕地と農村の遠隔は之が普通であつて、何等怪しむに足らずとなしてゐるのではあるまいか。圃場への往復に二時間も三時間も或はそれ以上を要するのも今に初まつたことではないではないかと済ましてゐるのではあるまいか。沖縄本島の農家が圃場への距離十七、八町をもつて遠しとなし、この遠きをもつて不利不便をかこつ心情解する農家の八重山に幾人居るだらうか…蔡温の新農村建設は仮令それが不首尾であつたにせ

よ、耕地中心の農村を創成したことは我々に教ふる所極めて多大である。

と分析し、マラリアの解決と農業土木事業の発達により、農村を耕地の近くに「分散配置することを八重山に於ける切実な農村問題」としている(石垣市総務部市史編集室 1990：757～759 頁)。

近世八重山の集落の特徴のひとつとして指摘した、耕地から遠隔地に立地する集落という点が、近代的な合理主義によって批判されている。耕地を分散するのはリスクの回避になるが、こういった居住形態は、農業を唯一の生業とするにはリスクが大きいということになる。

## 5. おわりに

歴史的に一箇所にまとまった集落で暮らしてきた八重山の人々は、古琉球から近世という時代の変化、「明和津波」という自然災害、宅地不足、そして耕地との距離などという諸問題があってもなお、あるいは集落の場所を移してもなお、同じ暮らしをしてきたのである。とりわけ、石垣島の集落は、1771 年「明和津波」ののちにいったんは高台へ移転したが、そこでの生活の不便を理由に、海岸近くのもとの集落に戻った。

つまり、八重山の集落は、ここにかかげたような諸問題＝リスクには対応していないようにみえるのだが、その集落は風水思想による抱護林によって守られているのである。人々が一箇所にまとまって住むという秘密は、そこにあるように思える。もちろん御嶽の祭祀や、共同体の紐帯、現代では字会の成員であることなどが、まとまって暮らすことの理由としてあるかもしれない。つまり、津波後に高台に残るなどの個別の選択がなく、一丸となって旧地での復興をはかるといったことは、そういった規制がはたらいて、その結果、一箇所に住んだということはいえそうだ。

ただし、具体的に集落を守るということでは、残念ながら風水では津波の被害から集落を守ることはできない。小島嶼での、崖の上で石垣に囲まれた「中世の村」に、むしろ災害リスクに対応した集落をみることができる。また、小島嶼では、近世集落は島の中央に存在し、津波などに対応できるように思える。そういった小島嶼の集落も当然ながら林に囲まれていたのだが、さらに島の外縁にサンゴ礁が発達しており、「明和津波」ではこれに守られたのである。

石垣島には河川が流れ、その河口にはサンゴ礁の切れ目が生じて、日常的には津（港）として利用されたが、津から遡上した波が集落を襲った。したがって、海岸近くに居住するのは、災害リスクをまったく考慮していないことになるが、それより当時の生活の便利さが勝ったのである。

現在では、1771 年よりさらに航路確保などのためにサンゴ礁が削られ、石垣四か村前には埋立地が広がっており、地震および津波の被害は甚大なものになる可能性がある。石垣市役所・竹富町役場をはじめ図書館・市民会館などが埋立地にあり、博物館は海に近いかつての蔵元の跡地にある。そのうえ、集落は風水によっても守られていないのである。

史料出典

大波之時各村之形行書→石垣市総務部市史編集室 1998 b

大波寄揚候次第→石垣市総務部市史編集室 1998 b

御手形写抜書→石垣市総務部市史編集室 1998 a

翁長親方八重山島規模帳→石垣市総務部市史編集室 1994

離方間切之村々廻見日記…琉球大学附属図書館所蔵宮良殿内文庫（内容的には内題の「卯年上国之時日記」が正しい）

北木山風水記→石垣市総務部市史編集課 2008

宮古・八重山両島絵図帳…琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育委員庁文化課『琉球国絵図史料集　第一巻　正保国絵図及び関連史料』沖縄県教育委員会　1992

参考文献

亜熱帯総合研究所（編集・発行）2000　『亜熱帯研究の総合的推進のための研究可能性の調査―沖縄における自然災害リスクとその対応力に関する基礎調査―』

石垣市総務部市史編集課（編集）2008　『石垣市史叢書 16』石垣市

石垣市総務部市史編集室（編集）1990　『石垣市史資料編　近代６新聞集成Ⅲ』石垣市役所

石垣市総務部市史編集室（編集）1994　『石垣市史叢書７』石垣市役所

石垣市総務部市史編集室（編集）1997　『石垣市史巡見５村むら探訪―安良の歴史・生活・自然―』石垣市

石垣市総務部市史編集室（編集）1998 a『石垣市史叢書 11』石垣市

石垣市総務部市史編集室（編集）1998 b『石垣市市叢書 12』石垣市

岩崎卓爾 1927　「乾隆三十六年（洋暦千七百七十一年）大波の時各村之形行書」『気象雑纂』1927 年７月号（のち『岩崎卓爾一巻全集』伝統と現代社 1974）

小野正敏 1999　「密林に隠された中世八重山の村」国立歴史民俗博物館『村が語る沖縄の歴史―歴博

フォーラム「再発見・八重山の村」の記録―』新人物往来社（なお、小野「先島の集落」財団法人沖縄県文化振興会史料編集課『沖縄県史　各論編第三巻　古琉球』沖縄県教育委員会　2010　参照）
崎山直 1975　「明治前期八重山の概況―『沖縄県八重山島統計一覧略表』―」東京・八重山文化研究会『八重山文化』第３号
崎山直 2000　「『アカハチ・ホンガワラの乱』とその時代」『八重山の歴史と文化』自費出版
島袋綾野 2005　「遺跡の立地、遺物から見た古琉球～近世への移行（試案）」八重山歴史研究会『八重山歴史研究会報』第 26 号（なお、島袋「近世琉球における『村』と『遺跡』」廣友会『廣友会誌』創刊号　2005　参照）
笹森儀助 1982　『南島探験　１』東喜望校注　平凡社東洋文庫
高橋誠一 2003　『琉球の都市と村落』関西大学出版部
高橋誠一 2007　『東アジア都城紀行』ナカニシヤ出版
高良倉吉（研究代表）2008　『沖縄の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究／平成 17 年度～平成 19 年度基盤研究（B）』
竹富町史編集委員会ほか（編集）2011　『竹富町史第二巻　竹富島』竹富町役場
得能壽美 2000 a「自然災害略史―伝承に見る八重山の自然災害と生活―」→亜熱帯総合研究所 2000
得能壽美 2000 b「古文書から読む『明和津波』―情報の収集と伝達を中心に―」→亜熱帯総合研究所 2000
得能壽美 2006　「《一枚の古文書》14 大城村新村設立の願い」八重山歴史研究会『八重山歴史研究会報』第 37 号
得能壽美 2007　『近世八重山の民衆生活史―石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク―』榕樹書林
得能壽美 2008　『史料が語る大川村の近世史』大川字会
得能壽美 2009　『古文書に見える白保村』白保村ゆらてぃく憲章推進委員会
得能壽美 2010　「中山政権と宮古・八重山」沖縄県文化振興会史料編集室『沖縄県史　各論編第三巻古琉球』沖縄県教育委員会
得能壽美 2012　「近世琉球の村・耕地・生業」民衆史研究会『民衆史研究』第 83 号
豊見山和行 2008　「『宮古八重山津波』（1771 年）における災害・年貢・復興について―石垣島と多良間島を中心に―」→高良倉吉（研究代表）2008
牧野清 1968　『八重山の明和大津波』自費出版（のち『改訂増補八重山の明和大津波』1981）
牧野清 1974　「八重山の古制『ハカ』に関する研究」琉球大学史学会『琉大史学』第５号
牧野清 1975　『登野城村の歴史と民俗』自費出版
松村順一 1994　「伊原間村の歴史―伊原間村と船越村を中心に―」石垣市総務部市史編集室『石垣市史巡見２村むら探訪―伊原間の歴史・史跡・地名・生活―』石垣市役所（のち『石垣島村むら探訪』1998 所収）
松村順一 1998　「安良村の歴史」八重山文化研究会『八重山文化論集（第３号）』
武者英二・永瀬克己 2000　「八重山地方の建築的遺構と民家・集落」法政大学沖縄文化研究所沖縄八重山調査委員会『沖縄八重山の研究』相模書房
八重山歴史研究会 1982　「古文書に見る乾隆三十六卯年（明和八）の大津波―その実像を求め、牧野氏への批判―」（「八重山毎日新聞」1982. 12. 7～12. 17）→八重山歴史研究会 2010 に収録
八重山歴史研究会 2010　『八重山歴史研究会誌　創刊号―八重山歴史研究会発足三〇周年記念号―』
琉球政府文教局 1967　『沖縄県史　第 20 巻　資料編 10 沖縄県統計集成』琉球政府

1 竹富島の集落の歴史的な展開については、『竹富町史　第二巻　竹富島』（竹富町史編集委員会ほか 2011）の通事孝作・狩俣恵一・金武正紀の論考を参照。

2 ただし、近世にも、同一村内に複数の集落がある場合もあり、小村（こむら）と称される。石垣島伊原間村の事例は〔松村 1994〕参照。

3 石垣島東海岸のほぼ中央に位置する桃里村（当時は盛山村も含む）の統計に未詳の部分がある。

4 宮古の蔵元は被害がなく、八重山・宮古との比較、さらに移転については、〔得能 2000：234～237 頁〕参照。

5 「明治期の村絵図」は現在、沖縄県立図書館が所蔵する。ここでは、1989 年石垣市で開催した「八重山古地図展」（石垣市総務部市史編集室編集・石垣市発行）の図録を使用した。